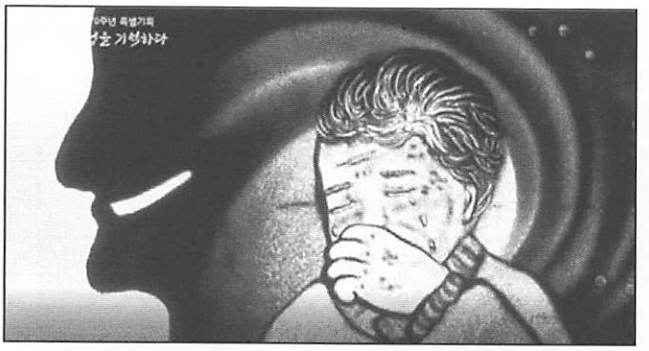
朝鮮戦争 70 周年特別企画―戦争、女性を記憶する



これは、韓国 MBC 放送が 2020 年に朝鮮戦争 70 周年特別企画として制作したテレビドキュメンタリーを文字化したものである。
（翻訳：鄭玹汀、監修：永谷ゆき子）

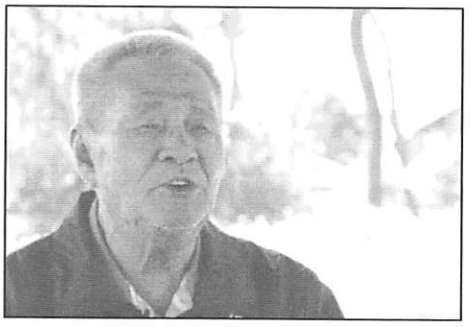
1 部：戦争の重さ

●李林夏（イ・イムハ）（聖公会大学（ソンゴンフェ）、東アジア研究所教授）

「私は朝鮮戦争をめぐって、単に戦闘の歴史だけを強調していることに疑問を持ちます。女性が戦時期どう生きたのか、また女性は戦争にどのように動員されたのか、また戦後、女性はどう生きたのか、という視点を持つことで、これまで触れられなかった国家暴力の問題など多くの事実が浮き彫りになるでしょう。そういう面で、これまで女性のことが抜け落ちてきたのではないか、沈黙させてきたのではないかという気がします。」

ナレーション（以下、ナと略す） 江原道江陵市（カンウォンドカンヌン チョダンドン）草堂洞、豆腐で有名な村です。ここは朝鮮戦争の際、大々的な虐殺が行われ、そのために寡婦の村になったところです。

●キム・ナムス（82 歳、江陵市（カンヌン）草堂洞（チョダンドン））



「村の 230 戸のほとんどが貧しい小作農で、地主は 4、5 戸しかない。地主の家で家族を働かせることで田圃を少し借りることができるが、小作の取り分は 3 割だけ。いくら働いても小作農は収穫の 7 割を地主に収奪される構造になっている。そこに人民軍がやって来て、みんな平等に暮らしているというから、小作農のほとんどが加入したんだよ。皆ハンコを押したが、結局、人民軍に協調したという嫌疑で韓国軍と警察に殺される事件があった。それで残った女たちは、生計のために豆腐の商売を始めたわけだ。」

ナ 江陵の草堂（チョダン）豆腐がこれほど有名になったのは、生き残った女たちの生計手段だったからです。生きるために豆腐の商売を始めた草堂の女性たち。当時、江陵中央市場には草堂豆腐横丁が作られていました。

ナ 夫や子どもと幸せに暮らしていた妻は、戦場で夫を失い、長く寂しい時間を送ります。
ナ 戦争は数多くの男たちの命を奪いました。戦闘中、避難中、また虐殺もされました。朝鮮戦争によって夫を亡くした女性の数は分かっておらず、これまで調査すらされていません。

●李林夏（聖公会大学、東アジア研究所 教授）
「戦争体験は個人によって温度差があり、個人それぞれの状況によって戦争体験も異なるのです。戦争で夫を亡くした妻の場合は、夫と別れた時、その時点が戦争の始まりです。」

ナ 2020年6月25日、朝鮮戦争が勃発してから70年になる日、新型コロナウイルス感染症の影響で、予定されていた記念行事は縮小されました。

【字幕：2020年6・25戦争70周年行事の現場― 鉄原（チョロン）の白馬（ペンマ）高地（激戦地）】

（劇のセリフ）　こんなところで死んじゃだめだ！起きろ！

●キム・オクチャ（70歳、戦没軍警寡婦会 江原道支部会長）
「みなさん20代に夫を亡くし苦難と逆境を経験なさいました。男たちはその苦難について想像もできないでしょう。当時、そういう女性は社会から見くびられていました。夫のいない女性は軽く扱っても良いという昔からの習わしや、女のお前が媚びるから悪いという根深い偏見があり、女たちは精神的な苦痛に苛まれていました。」

【字幕：江陵（カンヌン）市 邱井面（クジョンミョン）】

ナ：江陵市邱井面、ここに新婚時代に夫を亡くし一人で逆境の中を生き抜いたおばあさんがいます。認知症になって療養施設で暮らしています。

●チェ・ポクラン（92歳、江陵戦没軍警寡婦）
（介護者）朝鮮戦争が開戦した6月25日の日曜日がこの方の結婚式の日だったそうです。

聞き手　結婚して一緒に暮らしたのは？
「ほんのわずかの間だけ。どう生きればいいのか、いつも泣いてばかり。泣かない日がなかった。そのうち私は商売を始めたよ。」

聞き手　どういう商売ですか？
「缶詰や野菜などの商売をしたよ」

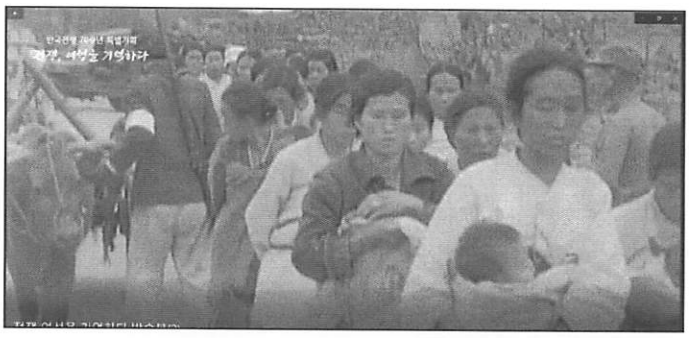
ナ 戦争は終り、夫は消えてしまいました。いきなり家長になったので、家族の生計のためにどんな嫌な仕事でもやりました。

「大変という言葉では足りないほど、大変苦労した。私に少し稼ぎがあると男たちが近づいて来るので、自己防衛のため、刃物まで持って自らを守った。夜も刃物を枕元に置いて寝るほどだった。」

●チェ・インスク（92歳、江陵戦没軍警寡婦）

「一人暮らしだから、夜怖くて眠れなかった。男が侵入してくる恐れがあったから。3月か4月のことだったが、電気を消して横になっている時、誰かが門を開けて入ってきたので、『どなた？』と聞いたら、ドアをパッと閉めてそのまま帰らない。私はその人の正体が分からないまま悔しくてたまらなかった。それ以降、男というと嫌気がさしてしまう」

ナ まだ背中から下ろせない小さい赤ちゃんがいる母親たちが、命の危険さえ覚えるほど大変だった生計維持の役割を負いました。夫を失った女たちに対して世間はなぜこれほど過酷なのでしょうか。



●李林夏（聖公会大学、東アジア研究所 教授）

「彼女たちは結婚して3ヶ月か1年程度でした。戦争の最中に妊娠していたか、あるいは出産間もない頃だから、子どもは多くて1～2人の場合が多かったですね。また彼女たちに戦争体験を聞いてみると、自分がどうやって避難したか、妊娠中の避難の大変さ、出産直後の避難の大変さが戦争体験として強く残っています。」

【字幕：1950年11月1日　大田（テジョン）】

ナ 占領軍はそこに残っていた民間人を虐殺しました。その時、南朝鮮の軍人や警察も無数に殺されました。

●イ・ヨンジャ（戦没軍警寡婦）

「（夫の）職業は大田警察署長でした。夫が殺されて、（私は）全羅北道錦山郡智異山面（チョルラブクトクムサン　チリサン）に避難しました。避難した翌々日に逮捕され、大田刑務所に移されました。（夫は）陰暦8月14日に傀儡軍により虐殺されたのですが、その後、遺体を探し回り、13日目にある山で見つかりました。遺体の状態をみると、

後ろ手に縛られ銃弾が両腕に当たっており、それから顔に傷があり、目玉が抜けていました。その後、遺骸を先祖の墓がある山に埋葬しましたが、その悔しさは言葉では言い表すことができません。」

【字幕：三陟（サムチョク）市庁】

ナ 虐殺についての記録は多くありません。子孫は白髪頭になっても父親の痕跡を探し求めています。

●パク・マンスン（忠北（チュンブク）歴史文化連帯 代表）

「連行されて集団虐殺された事件がありました。もしその記録が残っていたら、それを確認したいのですが」

ナ 三陟で虐殺された元警察の父の記録を探しているというチョン・ミョンヒハルモニ。藁をもつかむ気持ちで役所を歩き回りましたが、当時の戦争関連記録は国家主義的基準によって選択・抜粋されていました。

「三陟郡史をみても、そこには虐殺事件などの記録がありません。江原道史も調べてみましたが、その詳細については何も書かれていないですね。」
「ええ、ありませんね。」

●チョン・ミョンヒ（76歳、戦没軍警遺族）

「軍人と警察官の家族は避難するように言われたが、母が私に向かって石を投げながらついて来られないようにして、母一人で行ってしまったから最初は母を恨んだ。しかし、それは時代が悪かったせいで、父は銃殺され、母もそういうふうに死んだことが理解できて、今は母を恨まなくなった。」

ナ 戦争で死者も続出しましたが、一生消えることのない悪夢のように、障害を持つ身となった傷痍軍人も多かったのです。

【字幕：束草（ソクチョ）市　報勲会館】

ナ 傷痍軍警の妻たちはどんな人生を歩んだのでしょうか。

【字幕：キム・ソンチュンプロデューサー】

●ソ・スウォル（86歳、傷痍軍警の妻）

「服を着ていたので、義足ということに気づきませんでした。初夜を過ごしてやっと分か

り、後悔しました。誰でもそう思うでしょう。それでも、私の弟の面倒を見てくれるという話だったので、ありがたい気持ちもありました。」

●パク・スンナム（85 歳、傷痍軍警の妻）
「まったく知らないまま結婚しました。」

聞き手　知らないまま結婚したんですか？
「そうです。知っていたら、結婚するはずがないでしょう。言ってくれなくて騙されました。」

●イ・キボン（83 歳、傷痍軍警の妻）
「私はその人と結婚したくないと言ったが、両親が『いい人だから』と言い、無理やり結婚させられ、一緒になりました。」

●オム・ジョンヒ（89 歳、傷痍軍警未の妻）
「昔は一度結婚したら、死ぬまで続いた。今のように離婚して帰ってきたりできなかった。昔はそうでした。」

●イ・キボン（83 歳、傷痍軍警の妻）
「良い人だというから。その人のところ以外に、追い出された私が行くところもなく。」

【字幕：軍警合同結婚式】

＜1954 年 1 月 4 日　大韓ニュース＞
第 8 次傷痍勇士の合同結婚式がソウル市公館において、元国防長官の司会・進行で、全国民の祝福のなか挙行されました。一身を捧げ国家と民族を守る滅共の戦場で、不幸にも障害者となった勇士を支える伴侶になって…

「一度逃げたことがありますが、さんざん殴られました。逃げることもできない。夫が北朝鮮出身だから性格が激しく怖かった。黄海道（ファンヘド）出身の人は機嫌が悪くなると撲るからね。私は主人のために大変苦労しました。戦場で人を殺していたからかもしれない。長女が赤

ちゃんの時、目が黒くて可愛かったが、その子を置き去りにして家出することはできず、我慢した。」

●キム・テヒ（87 歳、傷痍軍警の妻）

「夫は激しい性格でした。私のお腹を足で蹴ったので、お腹の中にいた胎児が臍の下部に押されてそこで成長してしまった。早産したが、赤ん坊はカエルほどの大きさでした。夫は、その子は自分の子ではないと言い、自分の罪を省みることもなかった。」

ナ 病んだ身体、戦争のトラウマ、夫は心身の苦しみによる怒りを妻に対して発散しました。「この人も可哀そうだ」と夫に憐憫の情を抱き、子どものために耐えてきたのが、70 年という長い歳月でした。

【字幕：忠北（チュンブク） 清州市（チョンジュ）】

ナ それでも、保導連盟*の父や夫を持った人に比べると、国家有功者や傷痍軍人警察官の妻たちは良い方だったでしょう。

（*注：左翼やその家族を再教育するとして 1949 年設立された統制組織で、朝鮮戦争の勃発と同時に李承晩政権は、保導連盟加盟者や政治犯・民間人を大量虐殺した。）

●チョ・ヘジャ（76 歳、虐殺者遺族）

「縄で縛られた人々がトラックに載せられて警察署から出てくるのを見ました。その後どうなったのか全く分からなかった。後で、母から聞いた話によると、カドクというところで全員銃殺されたそうです。乳児まで含め子どもが 4 人もいるので、夫の死を確認するために探し回るのも難しかった。また、母は字が読めなかったので、他の人が遺体を探しに行くといっても母はそれもできず、何もわからないままになりました。」

ナ 遺体が見つかっただけでも運が良かったのでした。損傷がひどく誰か分からない場合や、初めから探しに行くことすらできない人が多かったのです。死と生が交錯しながら、残された家族は沈黙を強要されました。

「成長してから、やっと父が縄付きになったことの意味がわかったのですが、その時は目撃してもどういうことなのか理解できませんでした。保導連盟という言葉はタブーでした。アカの子どもと言われるからです。その後、家政婦として働きながら大変苦労しました。これまでやっと生き延びたといえます。」

【字幕：襄陽郡造山里（ヤンヤン チョサンリ）】

ナ 江原道襄陽郡造山里、ここは戦争前には北朝鮮の支配下にあった場所です。大多数の家長は戦争後に北朝鮮に行くことを選択するようになりました。家族を残したままです。

●カン・チャンギュ（83歳、襄陽郡造山里）
「韓国では私ができる仕事はなかった。」

聞き手 連座制ですね？
「うん、連座制だ。私は漢陽（ハニャン）大学を卒業して、就職先として農協に合格し、襄陽農協の辞令をもらったが一週間で辞令が取り消された。なぜ取り消されたかというと、近所に中央情報院の連絡員がいて、組合長に妨害工作をし、辞令の取り消しになった。組合長が家に来てそう言いました。怒っていましたよ。」

ナ 大韓民国は、戦争という名の国家暴力により夫を亡くした女性や家族に対して責任を取りませんでした。明確な真相調査と適切な補償が必要なのに、それを放棄しました。

●チェ・スンジプ（80歳、江陵）
「人民軍が女を狙ってきて、二人の人民軍が激しく抵抗する女を捕まえていった。」

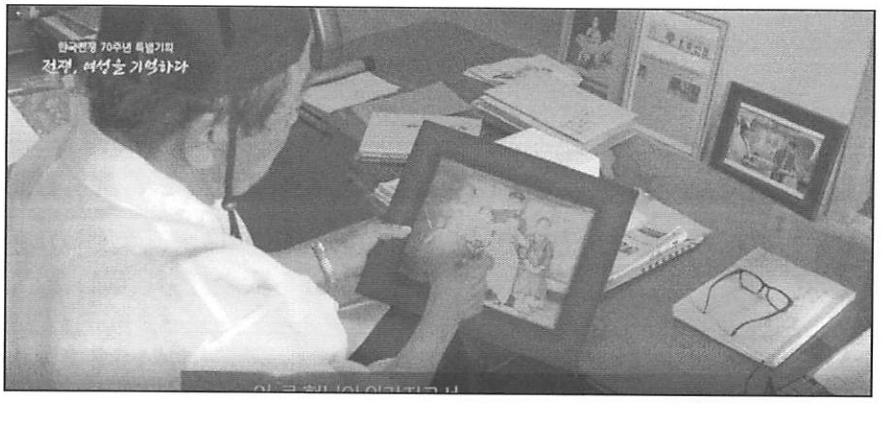
●パク・チェファン（90歳、江陵）
「自分が生きるために、妹を虐殺責任者（隊長）の欲情の犠牲者として渡すなど、やむを得ずそうなったこともあった。」

ナ 戦争中の性暴力に、無力な弱い女性たちはどうすることもできず、苦痛の日々を送った。

【字幕：忠清北道（チュンチョンブクト） 槐山郡（クェサン）松面里（ソンミョンリ）】

ナ 忠北の槐山、ここに米軍からの性暴力の犠牲になった幼い姉の話があります。

●パク・オンソプ（83歳、忠清北道槐山郡松面里）



（幼い姉の写真を見せながら）「この写真は私が 3 歳の時だったよ。上の兄さんが帰って来て一緒に写真を撮った。」
「米軍がここから 3 kmほど離れた小川のところに駐屯していたが、深夜、姉さんを拉致していった。誰かが左翼活動をする家だと告発したらしい。父親と一緒に引っ張られていった。明け方に帰ってきたが、強姦されたようだった。その時、姉さんは 16、7 歳の時だった。姉さんが泣きわめいていたら、母が『あなただけのことではない、しょうがない。いまの世の中では……どうしようもないから耐えるしかない』となだめた。お婆さんが話したので近所の人も、みんな知ることになった。米軍はここに一か月も駐屯した。後で聞いた話だが、米軍が道行く若い女たちを捕まえて強姦したという。」

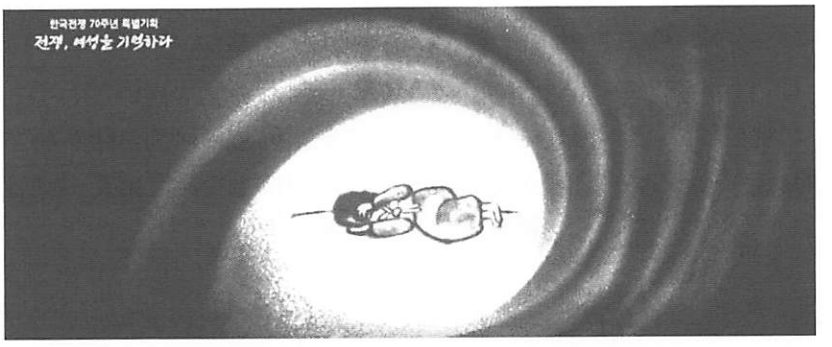
ナ 村を占領する主体が変わるたびに、住民は動員されました。韓国軍が来たら太極旗を、北朝鮮軍が入ってくると、その旗を振らねばなりませんでした。しかし銃をもった軍人たちは恐ろしい存在でした。とりわけ女性たちは無防備で脅威にさらされました。

「のちに姉は自殺した。娘二人を産んでから。その夫も間もなく亡くなった。」

ナ 朝鮮戦争当時の韓国軍の性的風紀の乱れによる事件に関する多くの証言があります。当時参戦した退役将軍は、こう語っています。

●パク・キョンソク将軍（88 歳、朝鮮戦争参戦 陸軍予備役准将）
「我が韓国軍の上級指揮官には女をめぐる問題があることを、目撃したり聞いたりしました。日本軍出身が大体そんなことをしました。臨時宿所を訪ねると、女が傍にいることが多かったです。そしてしょっちゅう女が裸にされているという話も聞いたこともありました。部下が女を連れてくるという話をよく聞きました。ところが、ひとつはっきり言えるのは、日本軍出身の指揮官たちが江原道一帯で女性に関する罪を犯したことは否めない事実だということです。」

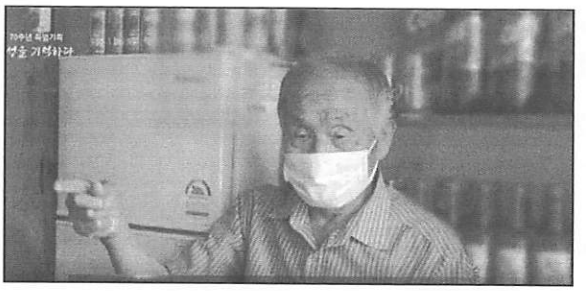
●カン・チャンギュ（83 歳、襄陽郡造山里）
「女たちを裸にさせて、部屋に入らせて、軍人がやりたい時、その中から女を選んで隣の部屋にいって性行為をする。女たちは 10～15 日くらいそんなことをさせられ、軍人が前方に移動する時、女たちはその束縛から解放される。それまでは女たちが逃げられないように裸にして部屋に監禁していた。」



【字幕：忠青北道丹陽郡盧洞里】

ナ 制作陣は朝鮮戦争当時、軍人によって虐殺と人権蹂躙が行われた、ある村を訪ねました。

●チ・ソンテク（83歳、忠北 盧洞里・磨造里事件の遺族）



「米軍の戦車が入ってくると発煙弾を発射し、あちこちで火事が起こりました。家に放火し、牛など動物、人も皆殺しです。女たちは強姦されました。彼女たちのことをよく知っていますが、今は全員亡くなりました。」

聞き手 当時、その女性たちの年齢は？
「みな、30歳以上でした。」

ナ 村の入口に、その時の犠牲者のための慰霊碑が立っています。

【字幕：忠清北道丹陽郡盧洞里・磨造里事件の慰霊碑】

ナ 犠牲者の名前だけでなく、当時の凄惨な状況が仔細に刻まれています。

「ここです、その犠牲者の名前が刻まれています。この人たちは、全員殺されました。碑の裏側に事件の詳細が書かれています。」

「これは盧洞里・磨造里事件遺族会の会員が一緒に書いたものですよ。」
「1951年1月10日のことです。これを読むと事件の全貌が分かります。家屋を回って一軒一軒放火し、人とその家族を殺し、臨月に入った妊婦を強姦し、真昼に米軍が女性を輪姦することもあった。犠牲者はみな故人ですが、これを読めばおおよそのことが分かる。」

ナ このように公式に慰霊碑を立てて、あの日の真実を知らせる村もありますが、多くの場

合、性暴力犠牲者に関する真相は、目撃者や証言がないとなかなか外部に出てきません。

●ソ・スウォル（86歳、傷痍軍警の妻）
「当時、19 歳以上になると、女性のほとんどが軍人たちに捕まえられて強姦されました。一人の夫にだけ仕えた女性は誰もおらず、軍人に連れて行かれるという経験を経て結婚した人が、その頃は多かったですね。米兵が来たら『オーケー、オーケー』と言えばいいというから、そう言ったら黒人兵士に連れて行かれた女たちもいました。」

●パク・スンナム（85歳、傷痍軍警の妻）
「いや、あの時は米軍が、お嬢さん、お嬢さんと口説きながら、懐中電灯をもって女を探すから、みんな、押し入れに隠れました。」

ナ ただ、息を潜めて生きてきた年月。若くて幼いという理由で、女という理由だけで、光を浴びることすら怖かった時です。

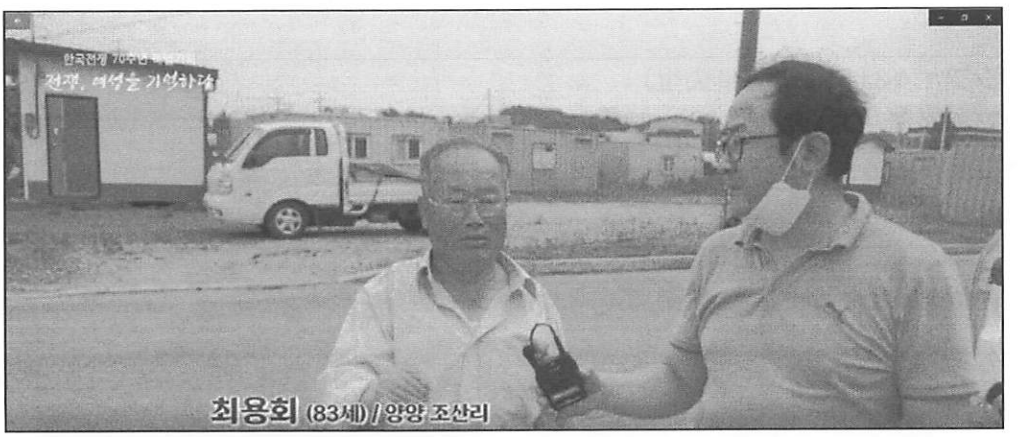
聞き手 女たちを犯すなど悪いことをしましたか？

●イ・キボン（83歳、傷痍軍警の妻）
「女を洞窟の中に入れて、軍人を一列に並ばせて交代でやらせるので、結局その女が死んでしまいました。」

●オム・ジョンヒ（89歳、傷痍軍警の妻）
「女は、みな隠れていました。私も松の実畑で、2 ヶ月の間、隠れていた。大人が食べ物をもってきたら、そこで食べていた。そういうふうにして生き延びました。大変でした。」

ナ 無視されてきた70年、これまで男性の視線によって扱われてきた戦争の記録。しかし当時の少女たちは憶えています。国家の黙認の下で性の搾取が正当化されるなか、女性が、性がいかに扱われてきたのかを。

●チェ・ヨンフェ（83歳、襄陽郡造山里）



聞き手　慰安婦がいましたか？
「そうです。この自動車道路の向こう側に。あの、警察署のある四つ辻があるでしょう？あそこなんです。」
「はい。そこに70人ほどいましたよ。」

聞き手　70人！韓国軍慰安婦がそこにいたということですか？束草（ソクチョ）ではなくて？
「そうなんです。いいえ、ここですね。」
「当時、慰安婦をどういうふうに運ぶのかというと、ドラム缶に入れてね。うん、ドラム缶に一人ずつ入れて車に載せてきて、降して…」

●パク・チェファン（90歳、朝鮮戦争参戦功労者）
「私が目撃したのは、1月4日の後退の後、また、北へと進んでいく時のことだった。夜、軍人一人ずつに慰安婦が割り当てられた。」

●キム・ヨンホ（90歳、朝鮮戦争参戦功労者）
「『キム軍曹、一緒に文岩（ムナム）にある慰安所に行きましょう。そこに慰安所があります』と言われました。それで、一度訪ねたことがあります。」

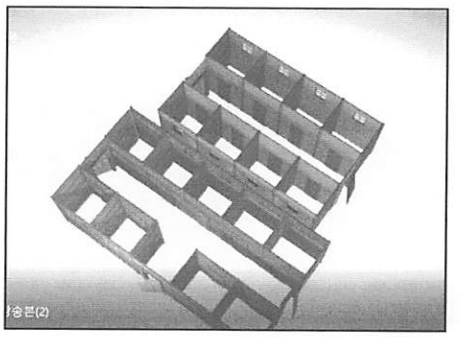
●チョン・ジョハン（88歳、朝鮮戦争参戦功労者）
「江陵市成德（ソンドク）にもありました。成德橋を越えたところにあった。軍慰安所があった場所は、南大川橋（ナムデチョン）（成德橋）がある成德というところです。そこに慰安所がありました。その村の住民なら誰でも知っています。私と同じくらいの年齢の人なら、みんな知っています。」

ナ　軍の士気を高めるという美名のもとに生み出された韓国軍慰安婦。語れない苦痛の中で生きてきた女性たち。

【字幕：襄陽郡造山里（ヤンヤン　チョサンリ）】

ナ　江原道襄陽郡造山里、ここでは一体、何が起こったのでしょうか。コンテナだけがポツンと置かれた場所に、韓国軍慰安所があったことを覚えている人は稀です。

●チェ・ヨンフェ（83歳、襄陽造山里）
「以前は自転車修理、自動車修理、パン屋、床屋、いわば大きなマートのような建物がここにあったが、あちら側には慰安所があった。」



聞き手　規模はどれくらいですか？
「あそこにコンテナがあるでしょう？高さはそのくらいで、コンテナくらいの大きさの家が二列あ

ったと覚えている。」

ナ 当時の状況をかなり正確に記憶しているお爺さん。それほど彼にとって韓国軍慰安所も慰安婦のこともショックを与えるものでした。

【字幕：証言で再構成した当時の造山里慰安所】

「噂によると、一人の女性が一日70人の軍人の相手をすることを強要されたそうだ。」

聞き手 ああ、70人も！
「目撃した人によると、早くしろ、と軍靴も脱がないまま、ベルトだけをほどいてやるんだけど、後ろの人が早くしろとせかして、足で蹴ったりしたそうです。慰安婦は公然たる存在でした。何をやっているのか、窓から全部見えたんですね。」

●パク・ジェファン（90歳、朝鮮戦争参戦功労者）
「ナンバーが配られました。順番が書かれている小さな紙が。地位の高い順番でやった。それを覚えている。」

【字幕：高城郡文岩里（コソン ムナムリ）－当時慰安所があったと推定される地域】

ナ 熾烈な戦闘が行われた江原道高城郡文岩里。休戦になるまで、軍人だけが駐屯した地域です。ここに韓国軍慰安所があったという証言を聞くことができました。

●キム・ヨンホ（90歳、朝鮮戦争参戦功労者）
「一部屋に女が一人いたが、その部屋には、常に水を入れたたらいがあった。女が一人終わるたびに、水を汲んで行くことを繰り返した。自分のと男のそれを洗ってから始める。出る時もまた洗ってやる。ずっと続けて男が入るから、10時まで一人の慰安婦が数十人の男と関係をすることになる。」

【字幕：六・二五事変　後方戦史　人事篇】

ナ 1956年国防部が編纂した公式文書『後方戦史』には、慰安隊の設置と概要などが明確に記録されています。

【字幕：特殊慰安隊】

ナ 「士気高揚はもちろん、戦争時に不可避の弊害を未然に防止し、後方との往来がないだけに異性への憧憬が募る生理作用による性格の変化等から鬱病その他の支障を来すことを予防するために本特殊慰安隊を設置することになった。」

●金貴玉（キム・キオク）（漢城（ハンソン）大学 教授）

「特殊慰安隊、つまり軍慰安所です。隊というのは、軍隊の隊を意味します。女性を 20～30 名単位にグループ化し、軍隊概念の隊と名付けています。普通、特殊慰安隊というと何だろうと思うこともありますが、日帝強占期を経験した方なら、それが何を意味するのか、すぐ分かりますね。」

【字幕：特殊慰安隊 実績統計表】

ナ 詳しく見ると、特殊慰安隊が相手にした韓国軍についての統計が実績という言葉で表現されています。地域、人員などがかなり詳細に記されています。

「激戦地ではいくつかの部隊が交替しますが、交替の過程で休んでいる部隊のところに女性たちを連れて行きます。いわゆる毛布部隊と言われるものです。毛布部隊は朝鮮戦争の時もありました。軍部隊は一時的に駐屯するので毛布部隊の形態で、家も作らず、いい加減なものでした。また、毛布部隊の証言によると、洞窟や民家など、適当なところが見つかると、毛布をカーテンの代用にして仕切りをつくるので、隣の声も丸聞こえという状態で、女性は人間扱いされませんでした。」

【字幕：江陵 1 小隊に 21 名で　計 71 名として】

ナ 当時の慰安所が一体どんなものだったのか？ そこで女性は、人格をもった存在ではなかったのか？ 証言者に尋ねてみました。

ナ 民家や軍人が無断占領した所に設けられたという韓国軍慰安所。

●チェ・ヨンフェ（83 歳、襄陽郡造山里）

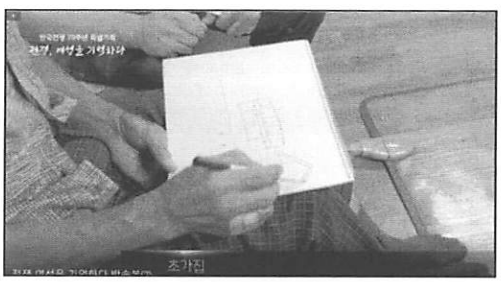
「自分の意思で来たのではなく、（ドラム缶に入れられて）乗せられてきたのだから」

聞き手　軍人たちが乗せてくるということですか？

「慰安婦だからね。」

●カン・チャンギュ（83 歳、襄陽郡造山里）

「廊下を入ると、間隔が狭い仕切り板が連なっている。このように。茅葺きの家なんだよ。二つの家がつながっていた。」



聞き手　ここに女性が一人ずつ入って…
「そう、みな一人ずつ入って座っていた。」

【字幕：チェ・ミョンシン将軍回顧録『死線を越えて』】

ナ　国軍の英雄と称されたチェ・ミョンシン将軍の回顧録にも、国軍の士気高揚のために用いたという慰安部隊のことが詳しく記されています。

●チョン・カプセン（ソウル大学社会発展研究所 研究員）
「日本軍慰安婦を日本軍の観点からとらえる場合、軍需品の観点から見ているということです。それと同じく、朝鮮戦争の時期に、女性たちを慰安婦として組織することもそのような観点から出発しています。つまり、女性たちを軍需品、あるいは使い捨て品以上には見ていない。それで、一般の人々は韓国軍慰安婦や米軍慰安婦が存在したことを忘却して来たのではないか。要するに兵士が銃をひとつ持っていたのと同じく、軍隊内に慰安の道具が必要となった際、女性が銃のような存在として認識されてきた。」

【字幕：性病統計表】

「もうひとつは、軍のために献身する愛国奉仕というような理屈を、民間人だけでなく、志願入隊した人はもちろん、国民みんなが持っているひとつの真理であるというように形成されていた社会であり、時代だった。」

【字幕：6師団看護兵 出典:12AR 3367 フランスアーカイブ（NAF）】

ナ　制作陣が入手した一枚の写真。6師団看護兵と呼ばれた女性たちの写真です。

聞き手　ある軍事専門家はもしかしたらそのような…
「ええ、慰安婦ではないかと十分に推測できると思います。私はこれをフランスで蒐集しました。フランスでも、説明文とともにマスコミ（AP）に配布された写真です。看護将校となっていますが、（それなら）軍服は着ません。基本的に白衣を着るか、簡易白衣を着

ますね。私が見たところ、看護兵ではないと思います。軍属の可能性もあり、基地村の女性、つまり韓国軍慰安婦の可能性もあります。スタイルから見て、ヘアーピンを付けているなど身なりに気をつかっているし、軍服もなぜか綺麗でしょう？ いま、茅葺き家屋の前に集まっていますが、軍属あるいは正規将校など正規軍なら、基本的に軍隊の認識番号が記されています。しかし、彼女たちには認識番号がありません。要するに軍属ではないかもしれません。軍属でもなく、看護兵でもなく、認識番号もなく、それにヘアスタイルを見ても軍属には見えない。私から見て、軍人とみなすことはできません。」

●パク・キョンソク将軍（88歳、参戦陸軍予備役准将）

「私が小隊長の時、大隊長がこのような女たちを連れて歩いていた。」

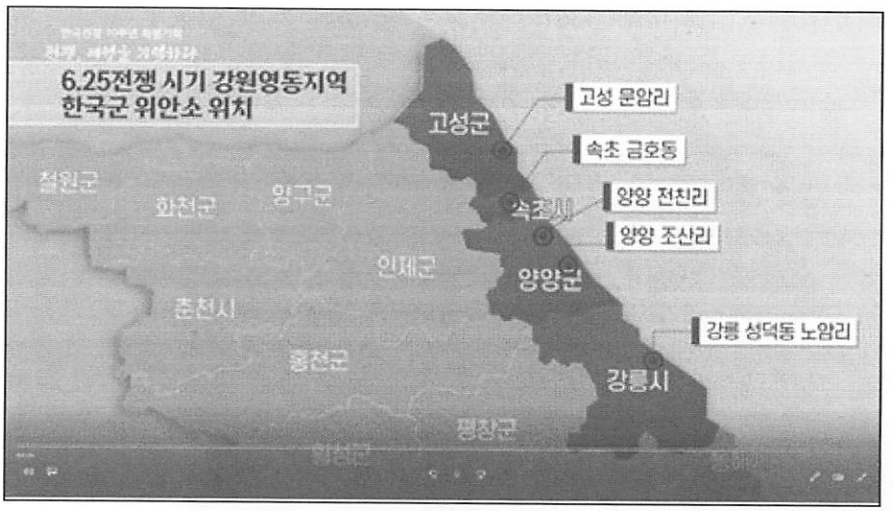
聞き手　このような女性をですか？

「うん、一人だけだったんだが。赤十字の腕章をしていた。それで私があの女は何をする人かと中隊長に聞いたら、それ（慰安婦）をやる女だと言われた。当時はそういう女に軍服を着せて連れ歩いた。」

「それから、師団長や連隊長が外部から連れて来させた女には、軍服を着せてから連れてきます。私が師団司令部に勤務していた時、女たちが師団長の宿所に入るところを見ましたが、みんなこんな軍服を着ていました。」

【字幕：朝鮮戦争当時の江原道 嶺東（ヨンドン）地域の韓国軍慰安所の位置
—高城郡（コソン） 文岩里（ムナムリ）、束草市（ソクチョ）琴湖洞（クムホドン）、襄陽郡（ヤンヤン） 前津里（チョンジンリ）、江陵市（カンヌン） 成徳洞（ソンドクドン） 魯岩里（ノアムリ）】

ナ　多くの証言を基にして制作陣が見出した江原道内の韓国軍慰安所は数多くありました。



◇朝鮮戦争期の江原道嶺東地域での韓国軍慰安所の位置（上から）

・高城郡文岩里
・束草市琴湖洞
・襄陽郡前津里
・襄陽郡造山里
・江陵市成徳洞魯岩里

●金貴玉（漢城大学 教授）

「どこから来たのかについては、元軍慰安婦の女性（生存する被害者）は証言を拒否したので、私が言うのは難しいです。その話はお墓までもっていくとおっしゃいましたから。その一方、軍人によって記憶されている人々がいます。いわゆる左翼運動の嫌疑をかけられた女性らの多くは軍人によって連行されました。その際、一部の女性が慰安婦にされたのだと、男性の軍人たちは推論します。それから、人民軍の若い女性たちや子どもが捕虜

として捕まったら、大体の場合、慰安婦として連行される可能性が高いと推測しています。捕虜として捕まった元人民軍が数人の女性についてそのように証言しています。また、私が聞いた証言として、北から南に来て軍人になった方の話ですが、所属部隊が北に行って女性数人を直接拉致して来て、慰安婦にしたと言っています。慰安婦の中には拉致された女性たちもいたことが分かります。」

【字幕：金貴玉教授が発見した韓国軍慰安所の位置】

聞き手:金貴玉教授　MBCチームが高城(コソン)・襄陽(ヤンヤン)を調査し、私は束草(ソクチョ)まで調査をしましたが、では、坡州(パジュ)、抱川(ポチョン)の方には（韓国軍慰安所は）なかったんですか。

●パク・キョンソク将軍（88歳、参戦陸軍予備役准将）

「そちらは主に米軍が担当しましたから。韓国の人々は失地回復というよりも北進統一を主張したから、江原道では命がけで戦ったんですね。しかし、そちら方面（朝鮮半島の中部から西側）は米軍が防御したんですね。」

（金貴玉教授）「中部戦線の方、また鉄原(チョロン)には韓国軍の部隊がいましたか？」

「はい、米軍も韓国軍もいましたよ。米軍がいる所はボコッと凹んでいるでしょう？」

（金貴玉教授）「鉄原(チョロン)にも韓国軍慰安婦がいた可能性があるのでは？」

「私が知る限りでは、そこから西の方には慰安婦はいなかったようです。」

ナ　もしかして、すべての激戦地に韓国軍慰安所があったのではないでしょうか。徹底した調査が求められます。戦争は終わったが、本当に終わったとは言えません。男性の視点から記録された歴史からは隠されている韓国軍慰安婦。無視したくなる不都合な真実だったのではないでしょうか。

●金貴玉（漢城大学 教授）

「国家が自ら真相究明と再発防止の約束、それから生存する被害者に―私は一部の女性は生存していると思います。まだ生きておられる可能性が高いです。彼女たちに被害補償を完全な形ですべきだと思います。まず私たちがそのような努力をすることで、一層堂々と日本に対して真相究明と謝罪を求めることができると、私は考えます。」

ナ　戦場の女性たち。明らかにされていませんが、その日々を生き抜いてきた女性たちが確かに存在しています。夫を失くした妻、父親を恨んでいた娘、補給品になって軍人に提供された女性の性。確かに彼女たちはそこにいました。手遅れにならないうちに彼女たちの終わらない話に耳を傾けなければなりません。

（了）